

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

# 生徒も教師も成長する 学校改革の真価を学んだ

兵庫県立小野高校 校長 **原 潤之輔**

校長の強力なリーダーシップの下、教師が一体となって挑んだ学校改革。わずか3年間で「進学したい学校の1つ」に生まれ変わった背景には、短期間でも結果を出すための、様々な取り組みの工夫があった。今、校長として改革を推進する原先生の原点に迫る。

## 改革中から情報発信



兵庫県立神崎高校に私が教頭として赴任したのは、当時の校長・増尾禮二先生が主導する改革の2年目です。増尾先生も私も柔道の指導者で、先生の指導力の高さは以前から耳にしていました。先生のそばでその手腕を見るのが出来るのは、自分の力を伸ばす好機だという期待がありました。

1年目の徹底した生徒指導により、学校はだいぶ落ち着いていました。長く続いた荒れのため、地域は学校に不信感を抱いていました。「悪いことは全て本校の生徒のせい」にされて悔

しくはないのか」。増尾先生は生徒や教師にそう言い、「責任は私が取る」と地域と連携した活動を次々に打ち出しました。

「デイスカバリ村」は、増尾先生が学校に合う事業を探し出し、文部科学省の指定を受けて始めた事業です。生徒が地域の協力を得て、廃屋を改築した宿泊施設で、地域住民と一緒にしめ縄や漬け物をつくるなど、地域交流の拠点としました。

また、部活動の活性化のために、県内で部の数が少ない、自転車競技部、ゴルフ部、射撃部をつくりました。道具は増尾先生が自らケーブルテレビで呼び掛けて不用品を寄付してもらい、指導は地域や知り合いの競技者に依頼しました。更に、清掃ボ

ランテアや地域の幼稚園で児との交流なども行いました。すごいと思うのは、進行中の改革を成果も出ていないうちから地域に発信していったことです。増尾先生が自ら学校新聞を書き、それを町の掲示板に貼ったり、中学校に配布したりしました。病院や商店など人の集まる場所にも置いてもらいました。

「学校が変わろうとしている」という期待感が中学生や保護者の学校に対する見方を変えたのでしよう。改革2年目の入試で定員割れが解消。翌年の入試では、特色選抜で県内公立高校トップの4・13倍を記録したのです。

アを具現化し、生徒が生き生きした姿に変わっていくのを見て、私は改革を進める上で大切なことを学びました。その後、4校の校長を務めました。指導困難校でも進学校でも、経営の基本はそこにあります。

まず、共通の危機感を持つことです。学校は1人では変えられず、周囲の協力が必要です。同じ方向に進むためには、同じ原動力が必要であり、危機感は何より人を動かします。初めて校長として赴任した夢前高校は荒れがひどく、定員割れが常態化していました。私は赴任の挨拶時、先生方に改革案を示し、自ら先頭に立って進める意志を伝えました。そして、朝は先生方と一緒に校門に立って生徒指

## 知恵を尽くして考える

教頭として増尾先生のアイデ

## 先輩教師の言葉

改革推進の鍵は  
共通認識と  
協働実践にあり

兵庫県・私立神港学園神港高校 校長 **増尾禮二**



学校改革をスピーディーに進める鍵は、共通認識と協働実践にあると考えています。その点で、学校内だけでなく、地域とも共通認識を持てたことは、神崎高校の改革の大きな力になりました。

赴任時、私は自治体や商工会議所を訪れて改革の強い決意を伝えました。すると、「学校が悪くなったのは、地域にも責任がある」と、地域の方々がデイスカバリ村や清掃ボランティアなど、様々な活動を一緒に進めてくれたのです。その様子を学校新聞などで伝えることで応援の輪が広がっていき、地域との触れ合いが深まるに連れ、生徒は次第に自信を持つようになっていきました。地域との連携な

左 ますお・れいじ 兵庫県立神崎工業  
高校、小野高校等を経て、神崎高校校  
長に。西脇工業高校・加古川西高校校  
長、明石市教育委員会生徒指導支援担  
当課長を務めた後、2014年から現職。

右 はら・じゅんのすけ 英語科。兵庫  
県立教育研修所、神戸聾学校（現・神  
戸聴覚特別支援学校）等を経て、神崎  
高校教頭に。夢前高校、加古川北高校、  
豊岡高校の校長を務めた後、現職。

撮影◎神港学園神港高校にて



導を行い、行動でも意思表示を  
して、意識を浸透させました。

地域から注目されるような取  
り組みは、改革の推進力になり  
ます。加古川北高校では、グロー  
バル化を推進するために受け入  
れていたフィンランドやドイツ  
などからの留学生には、部活動  
にも入ってもらいました。また、  
アメリカ人を理科の実験助手に  
迎え、バスケットボール部の顧

問もお願いしました。通学時だ  
けでなく、放課後、グラウンド

で外国人と生徒と一緒に練習を  
している姿を見れば、学校の取  
り組みをすぐに分かってもらえ  
るからです。

普段から、先生や生徒と共  
に行動することも心掛けまし  
た。草むしりをしながら雑談を  
し、その会話から先生方の思い  
を聞き取っていく。生徒の良い

ニュースがあれば、みんなに伝  
え、褒めたたえる。そうした心  
の交流の積み重ねが、信頼感を  
生むのだと思います。

校長の赴任期間は3〜4年と  
短いものです。しかし、知恵を  
尽くして実行すれば、結果は出  
ます。増尾先生はよく言ってい  
ました。「何でも実行せなわか  
ん」と。

神崎高校の自転車競技部は、

創部2年目に全国大会出場を果  
たしました。その生徒は、大き  
な自信を得て勉強にも積極的にな  
り、大学に進学して教師にな  
りました。増尾先生と共に改革

を成し遂げた先生方の多くが今  
は校長となり、学校経営に尽力  
しています。生徒も教師も大き  
く成長していく。これからもそ  
うした学校づくりをしていきたく  
いと思っています。

くして、学校改革はありえま  
せんでした。

改革には校長のリーダー  
シップが重要ですが、1人で  
成し遂げられるものではなく、  
生徒や教師と力を合わせて  
進めなければなりません。  
原先生には、他の先生方を束  
ねて、様々な取り組みを実現  
する役割をお願いしました。

私はせっかちで思い立った  
らすぐに実現したいというタ  
イプですが、原先生は仕事が  
早く、夕方に頼んでおいた書  
類が翌朝には出来ていること  
もよくありました。また、ディ  
スカバリー村などは、私の思  
いを酌みつつ、彼なりの工夫  
のある活動になっていました。  
そうといった熱意は頼もし  
く、改革が進むに連れ、何で  
も安心して任せられるプレー  
ンとなっていきました。

予算や人事などの壁があり、  
通常なら実現が厳しいと諦め  
てしまいたいようなことも、校  
長の裁量で解決できる問題も  
あります。私は、原先生に自  
分の仕事を見せることで、校  
長には何ができ、また何をす  
べきなのか、学校経営の全て  
を伝えていきました。それを  
彼なりに消化し、校長として  
学校改革に生かしてくれてい  
ることは、頼もしい限りです。